

「連携」と「協働」の概念に関する研究の概観

—概念整理と心理臨床領域における今後の課題—

鹿児島市精神保健福祉交流センター

医療法人仁心会 松下病院

鹿児島純心女子大学大学院

中 村 誠 文

岡 田 明日香

藤 田 千鶴子

和文要旨

心理臨床現場である医療・福祉・教育・産業といった様々な領域での業務、また臨床心理学的地域援助において、他職種や同職種との「連携」「協働」は非常に重要である。現在は、「連携」「協働」をキーワードとした研究論文が多数ある。しかしその研究内容をみると「連携」「協働」の重要性・必要性が述べられ、援助や支援の実際的方法や具体的運用について論じられその方略が展開されているものの、その多くが「連携」「協働」の定義・概念には触れられておらず、共通の定義・概念が定着していないのが現状である。本稿では、特にその相違に着目しつつ、「連携」と「協働」の定義や概念の整理および再検討を試みることを目的とする。また、それらを明確にすることによって見えてくる、心理臨床の視点からの「連携」「協働」の可能性、今後の課題を考察する。

キーワード：連携 協働 概念整理

I はじめに

1988年に「(財)日本臨床心理士資格認定協会」が設立され、以来24年が経ち臨床心理士有資格者も約2万5千人となり、医療・福祉・教育・産業等、幅広い領域で臨床活動を行っている。

日本の臨床心理学は、個人臨床の歴史が主流であり(下山, 2001)、セラピストクライアントという二者関係において、非日常性を帯びた面接構造のもと、治療構造を設定し、援助活動が行われてきた。

近年は、被害者・被災者支援をはじめ危機介入としてコミュニティ・アプローチの重要性が叫ばれ、アウトリーチなどの様々な形での臨床活動が増えてきている。また、教育現場でも教師が心理臨床家に求める役割として「連携やつなぐということ」を求めている」ということが調査結果でも示されている(中村, 2007)。求められるニーズや様々な領域に携わる職種も多様化し、専門職の細分化が進んでいるからこそ「連携」「協働」が更に求

められているといえる。医療現場では、医療チーム内の専門職種間で連携を行い、精神保健福祉領域では、施設と行政機関等が連携を取りながらニーズに合わせ対応を行ってきたが、臨床現場で実践を行っていくにあたり、多職種間での「連携」「協働」は必須であり不可欠な課題、取り組みでもある。

1970年代から「連携」「協働」といった表現が用いられた論文が発表されるようになった。特に精神保健福祉領域において、「連携」が叫ばれ推進されるようになった背景の1つに、1993年の公衆衛生審議会意見書がある。この中で社会復帰対策、地域精神保健対策として「医療・福祉・行政機関が連携体制を強化すること」の課題が明示されたことが大きく、2000年代に入り更に数多くの論文が発表されている。また、「連携」が求められる背景には、「①ニーズの多面的な全体像の認識と、それに伴う②単一的サービス提供における限界の認識、さらには③協働型サービス提供に

おける目標達成可能性の認識、といった3つの認識が援助実践者にとって自明のものとしてある」(吉池・栄, 2009)とも述べられている。

精神保健福祉領域で「連携」という言葉が推進され始めていく中で、心理職でより一層「連携」「協働」の重要性が語られるようになったのは、平成7(1995)年度からの「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業(以下、SC事業)」の始まりである。これを機会に教育領域での活動が本格化し、他職種との「連携」「協働」といったそれまでとは違う視点・役割が更に求められることになっていった。そして、地域精神保健において「精神疾患の治療よりもむしろ予防」という流れからコミュニティ心理学の視点が心理臨床家にも求められるようになったということも、「連携」「協働」という視点が推進される背景にもなっているのではないかと考えられる。これらが契機となり、様々な新しい領域が生まれていく中で心理臨床家の役割やスタンスにも転換が図られ、コンサルテーション(Consultation)、リエゾン(Liaison)という役割が求められ、今日では、「連携」より「協働」という言葉をキーワードとしてよく耳にするようになった。しかし、「連携」と「協働」という言葉がその意味の違いが曖昧なままで同義語として活用されているという現状もみられ、そういった中で、「連携」や「協働」をキーワードとした研究論文が多数発表されている。論文内容をみると「連携」「協働」の重要性・必要性が述べられているもの、援助や支援といった実際的方法や具体的運用が多く展開されており、その多くが「連携」「協働」の定義や概念には触れられておらず、共通の概念というものが定着していないのが現状である。洋文献では、「連携」は“collaboration”と明確に区別されていないにもかかわらず、和文献では「連携」と「協働」と区別がなされており、定義・概念の区別が不明確であるため各々その用い方は様々である。

そこで本研究では、「連携」「協働」の実際的方法や具体的運用ではなく、「連携」「協働」の相違について明らかにし、「連携」と「協働」の定義・

概念を整理・再検討することを主な目的とする。その上で、心理臨床の視点から「連携」「協働」の可能性、今後の課題を考察する。定義・概念を明らかにするからこそ見えてくる課題もあるだろうと考えるからである。これらの検討が、更なる「連携」と「協働」の促進の寄与になればと考える。

II 研究方法

文献研究の方法については、心理臨床・医療・精神保健福祉・教育の領域で「連携」「協働」の概念について述べられている文献を選定し、概念整理を行うことにした。文献を収集するにあたり、各領域の書籍、学術論文を調べ、CiNii-Aericles(国立情報学研究)も活用した。

先行研究で「連携」の概念整理における文献研究を行っている吉池・栄(2009)が、研究にあたり『和文献に焦点をあてた理由として、洋文献では、「連携」を示す際に、“linkage” “coordination” “cooperation” “collaboration”などの用語が明確に区別なく用いられていたからである』と述べているように、本研究でも和文献に焦点をあて研究を行うこととした。また、野中(2007)は、構成員相互の関係性の密度に着眼して、第一段階の「linkage=連結」、第二段階の「coordination=調整」、第三段階の「cooperation=連携」、第四段階の「collaboration=協働」と訳し分けられるのではないかと提案している。筆者らもこれを参考にし、「コラボレーション」と「協働」は同義語として「連携」「協働」の定義・概念の整理を試みたい。

III 「連携」「協働」の歴史的背景と定義・概念

1. 「連携」の歴史的背景と定義・概念

1) 「連携」の背景

わが国では、1970年代から社会福祉分野・精神保健福祉分野で「連携」といった言葉が用いられた論文が発表されるようになり、「連携」は実際の臨床の場で活動、促進されていった流れがある。その背景の1つに、1963年に当時アメリカ大

統領であったジョンF. ケネディが「精神障害者と精神薄弱者に対する教書」を発表し、それに基づいて、「地域精神保健センター法」が施行されたことがある。精神保健の総合的な地域社会へのサービスが広がり、キャプラン(Caplan,G.,1964)の「予防精神医学」の考えも公衆衛生の土台となった。また、それより先に1950年代後半から60年代前半での脱施設化の施策によって、精神医療において病院(入院治療)から地域への移行が始まったことも大きい流れとなった。

その後、日本でも1980年代に精神衛生法が精神保健法に改正され、1991年に国連総会で採択された「精神疾患を有するものの保護及びメンタルヘルスケアの改善のための諸原則」を踏まえ、精神保健福祉法が制定された。そこで病院や施設から地域ケア、社会参加が叫ばれるようになった。そして、1993年の公衆衛生審議会意見書がある。この中で社会復帰対策、地域精神保健対策として「医療・福祉・行政機関が連携体制を強化すること」が課題として明示されたことが大きく、多職種との関わる機会が増え、「連携」という言葉が一躍脚光を浴び2000年代に入り更に数多くの論文が発表されている。

心理臨床領域においては、「連携」を語る上で3つの波があるといえる。

まず、心理臨床家も医療現場等でチームとして他職種と「連携」をとってきたことに加えて、地域精神保健という流れからコミュニティ心理学の発展が、「連携」がより求められたきっかけの1つである。コミュニティ心理学が旗揚げをしたのは、1965年5月のボストン郊外での「地域精神保健に携わる心理学者の教育に関する会議(ボストン会議)」である。その会議で「コミュニティ心理学は、個人の行動に社会全体が複雑に相互作用する形で関連している心理的過程全般について研究を行うものである。この関連を概念的かつ実験的に明確化することによって、個人、集団、さらには社会体系を改善しようとする活動計画の基礎を提供するものである(Bennett,C.C.,et al.,1966)」とされた(山本,2000)。また、その後もコミュニ

ティ心理学について、いくつかの定義・概念、特徴、基本姿勢、役割が提言されている(山本,同上)。

2つ目に、1980年代から精神医療領域でリエゾンという言葉が用いられるようになった。リエゾンの語源は、もともとフランス語で単語が結びつく連音に由来しており、「連携」や「つなぐ」と訳されることが多い。リエゾンの定義もいくつかあるが、森下(2008)は、小此木ら(1992)の「精神医療領域では精神科医と他科の医療スタッフが継続的な連携システムを作り、他科のクライアント(以下CI.)の精神面の心療をおこなうことである」を引用し、心理臨床で使われているリエゾンについては、「他領域、他部門、他業種の関係者と協力、共同してクライアントへの援助をなす場合を連携と称する(巻頭言)」と述べている。

そして3つ目に、心理職でより一層「連携」の重要性が語られるようになったのは1995年度(平成7年)からのSC事業の始まりである。これを機会に教育領域での心理臨床活動が活発になり、これまでとは異なる他職種との「連携」「協働」といった役割を求められるようになった。

このように、「連携」は国の政策と共に多様なニーズによる協働型の支援、職種の細分化の影響により推進されてきた背景があり、心理臨床家の活動領域を含めて専門性の枠の広がりが出てきた結果ともいえる。

2) 「連携」の定義・概念

「連携」という言葉の意味は、辞書によれば「同じ目的を持つ者が互いに連絡をとり、協力し合って物事を行うこと(広辞苑)」と明記されている。洋文献をみると、「連携」を示す際に、“linkage” “coordination” “cooperation” “collaboration”などの用語が明確に区別なく翻訳され日本で使用されているので用語の混乱があり、「連携」の定義・概念も不明確で、各々の専門家に整理されている段階である。そこで、まずは「連携」という語を用いている先行研究を概観していきたい。「連携」の定義・概念整理をす

るにあたり、野中(2007)、吉池・栄(2009)の先行研究が手がかりとなる。山中(2003)や吉池・栄がまとめた「連携」の定義を、現在までのものと合わせて再検討を行い表1.に「連携」の定義概念についてまとめた。

①欧米の各論者の定義・概念

欧米の論者らは「連携」の具体的な行為や活動に着目し論じている特徴があり、“collaboration”という単語が使われているのではないかと推測される。この為、洋文献では、「連携」を含めたものとして“collaboration”となっており、和訳される際に「連携」「協働」の双方で訳されている場合があり、混乱のもとにもなっている。本稿では、「コラボレーション(collaboration)」と「協働」は同義語として捉えているため、洋文献については「協働」の定義・概念整理の項で述べていきたい。

②前田(1990)の定義・概念

前田(1990)は、「連携」を英語で“coordination”と述べ、「連携とは、異なる分野が一つの目標に向かって一緒に仕事をすることである。(略)別々の組織に属しながら、異なった職種の間でとる定期的な協力関係である。その時々いくつかの組織間による連絡よりは、業務の上で確立された協力関係といってよいであろう(p.13, l.4)」と意味づけている。また、連携が強化され発展していくと異なる組織や分野の一体化がなされ、このような状態を「統合」と述べている。この「統合」に至るまでに「連絡(別個の組織, 随時の情報交換)」、「連携(異なる組織, 定期的な業務提携)」、「統合(1つの組織, 恒常的なつながり)」という3つの状態を発展段階的に理解し、その発展を模式化して示している。連絡(点へのサービス), 連携(線で結ばれる), 統合(「面」としてシステム化)と捉え、「連携」とは、連絡から統合へ橋渡しをする1つの移行段階であるとも規定し、その目的は、「連携によって事業や活動をより効果的にし、効率化することである(p.15, l.17)」とも述べている。

③高山(1993)の定義・概念

高山(1993)は、「連携」を行う目的として「従

来の自己完結的な支援に留まらず、より一貫性の高い、総合的な支援を実施する目的で協力体制を築くこと」としている。これについては、山中(2003)が「『連携』が単独援助者の限界性の認識を前提としており、今までの援助よりさらに多様で総合的な援助の実現を示唆しているともいえる(p.4, l.20)」と考察している。

④久保(2000)、長谷川(2001)の社会福祉援助方法としての定義・概念

保健・医療・福祉の「連携」概念についての整理を試みた久保(2000)は、「保健・医療・福祉の各専門職ないしは各機関がある共通の目標に向けて互いに協力しながら遂行すること(p.111, l.7)」と定義している。また、長谷川(2001)は、「連携」を社会福祉現場で行われている生活問題の緩和・解決のための社会福祉援助方法として位置づけ、「連携は、『連絡』『調整』を含みながら、あるいは踏まえた上での、二者以上の援助職の分業と協業による協働的な社会福祉援助活動、あるいは専門職間の了解のうえでの委任形態による代表的援助職によって行われる社会福祉援助活動(p.205, l.2)」と表現している。

⑤松岡(2000)の定義・概念

松岡(2000)は、「連携」を英語で“collaboration”としており、「協働」の方が適訳かもしれないと述べる一方で、地域福祉における歴史的背景から“collaboration”を「連携」とし、専門職間「連携」を再検討している。各論者による専門職間連携とチームワークの定義をまとめ、これらの共通項から、「二人以上」の「異なった専門職」によって、「共通の目標達成」をするために行なわれる「プロセス」であると抽出している。「連携」という概念は動詞によって表現されることによって最も理解されるとき、それは絶え間なく変化して、その時々によって異なることを意味し、連携を形態あるいは構造として捉えることは容易でないとも述べている。その上で、専門職連携とは、「主体性を持った多様な専門職間にネットワークが存在し、相互作用性、資源交換性を期待して、専門職が共通の目標達成を目指して発展するプロ

セスである(p.22,1.15)」と定義づけている。そして、連携を連続体として捉え、連携の特徴(相互利益性・相互依存性・相互作用性・協定行動・共同生産)を指摘し、専門職間連携のモデルについても言及している。

⑥山中(2003)の定義・概念

山中(2003)は、欧米あるいは日本の論者らによって提示された「連携」の定義をまとめ、「援助において、異なった分野、領域、職種に属する複数の援助者(専門職や非専門的な援助者を含む)が、単独では達成できない、共有された目標を達成するために、相互促進的な協力関係を通じて行為や活動を展開するプロセスである(p.5,1.14)」と定義づけている。

吉池・栄(2009)によるとGermain(1984)の示した協力過程やAbramson&Rosenthal(1995)の指摘する相互利益性等に依拠しつつ、より「連携」概念の一般化を試みている。

⑦吉池・栄(2009)の定義・概念

吉池・栄(2009)は、各論者の「連携」の定義・概念の整理を行い、「連携(cooperation)」、「協働(collaboration)」、「チーム(team)」の概念の関係性について、「連携(cooperation)」と「協働(collaboration)」を階層性のある手段的概念であると考へ、協働を実現するためのプロセスを含む手段的概念を「連携(cooperation)」とすることを提案している。さらに、彼らは松岡(2000)の指摘(「最も公式性が高く、相互関係性の強い専門職間連携をチームワークとする」)を踏まえて、「連携」過程の最終的な段階がチームワークであるとし、「連携」の概念の可視化された実態として「チーム(team)」があると整理している。

⑧奥野(2010)の定義・概念

奥野(2010)は、「連携」について、必要性の視点から検討して連携を定義し、連携が必要である第一の理由として「サービスを利用する当事者からの視点」があり、様々なニーズを満たすためには、各種分野間や様々な専門職、また、障害当事者及び家族間との連携が必要であると述べている。

また、用語に関して、総合的なリハビリテーションを実施するには調整役が必要であることが言われてきたことを挙げ、連携の英語は“coordination”ではないかと提案している。また、それに近い用語として、“collaboration” “cooperation” “linkage” “net-working” を挙げる。

表1. 連携の定義・概念

前田(1990)	連携とは、異なる分野が一つの目標に向かって一緒に仕事をする事である。(略)別々の組織に属しながら、異なった職種の間でとる定期的な協力関係である。その時々いくつかの組織間による連絡よりは、業務の上で確立された協力関係と云ってよいであろう。(p.13,1.4)
高山(1993)	保健・医療・福祉に関連する専門職および施設機関が従来の自己完結的な支援に留まらず、より一貫性の高い、総合的な支援を実施する目的で協力体制を築くこと。(pp.76-77)
久保(2000)	保健・医療・福祉の各専門職ないしは各機関がある共通の目標に向けて互いに協力しながら遂行すること。(p.111,1.7)
松岡(2000)	専門職連携とは、「主体性を持った多様な専門職間にネットワークが存在し、相互作用性、資源交換性を期待して、専門職が共通の目標達成を目指して発展するプロセスである。(p.22,1.15)
長谷川(2001)	《(連携の)性格・定義》 「連携」は、「連絡」「調整」を含みながら、あるいは踏まえた上での、二者以上の援助職の分業と協業による協働的な社会福祉援助活動、あるいは専門職間の了解のうえでの委任形態による代表的援助職によって行われる社会福祉援助活動。(p.205,1.2)
山中(2003)	「連携」とは、「援助において、異なった分野、領域、職種に属する複数の援助者(専門職や非専門的な援助者を含む)が、単独では達成できない、共有された目標を達成するために、相互促進的な協力関係を通じて行為や活動を展開するプロセスである。(p.5,1.14)
吉池・栄(2009)	「連携(cooperation)」とは、協働を実現するためのプロセスを含む手段的概念。(p.116)
奥野(2010)	障害のある人が自立し、社会参加していくことを目的とし、一人ひとりのニーズにあった総合的なリハビリテーションサービスを提供するために、障害当事者の視点に立って、複数の専門職、複数の機関が協力をして、最適な、効率的なサービスを提供するための方法である。(p.8,1.38)

2. 「協働」の背景と定義・概念

1) 「協働」の背景

欧米では、医療保健福祉領域のチームワーク研究は1950年代から盛んであったという(野中,1999)。

臨床心理学の領域では、職種間の協力の方法は、1960年代からコミュニティ心理学の重要な方法として提唱されていった流れがある。コラボレーションが注目されていった背景は、上記の1.1)「連携の背景」と重なって発展をしてきている経緯もあり、コラボレーションという言葉は、欧米においては1970年代から広まり始めた。

日本での歴史的背景をみると1991年に精神保健福祉法が制定された。また、1993年の公衆衛生審議会意見書で社会復帰対策・地域精神保健対策と並んで、「協働」につながる重要な提言がなされた。それは、医療体制に医師・看護師以外の作業療法士、精神保健福祉士、心理士などのメディカルスタッフを入れた「チーム医療」の導入の発表であった。それ以前に「チーム医療」については、日本では主に看護師が「チーム医療」の必要性を述べ、細田(2009)によると「1970年代の『看護』という看護師向けの雑誌と、『病院』という病院管理者を主に読者に想定した雑誌の中にみつかった(p.47,1.28)」と報告されている。

日本の臨床心理領域においては、コミュニティ心理学や1995年度(平成7年)からのSC事業の始まりをきっかけに2000年代に入ってより注目を集めるようになった。藤川(2007)は、日本の臨床心理学におけるコラボレーションに関する研究について、「かつての臨床心理学研究は、臨床心理士が単独で行う心理面接や心理検査に関する事例研究が主流であり、異職種とのチームワークやコラボレーションの研究は数少なかった(p.22,1.12)」と述べている。藤川はまた、臨床実践活動の現状に関して「日本の臨床心理学の領域では、コラボレーションという概念が紹介されたことにより、従来の様々な臨床実践活動も、この概念に基づいて見直され始めている段階にある(p.22,1.17)」と言及している。

藤川(同上)は更に「イギリスの臨床心理士(clinical psychologist)の専門性について論じたMarzillierとHallによるテキストでは、他職種や利用者と協働することが、臨床心理士の専門的活

動の重要な一部であるという前提がある(p.21,1.14)」と述べている。英米においては、政策とも関連しコラボレーションによる臨床心理サービスの構成が様々な領域で行われており、活動のモデル生成、サービス構成の効果や課題が議論されている段階である。近年は、日本においても専門雑誌で「コラボレーション」の特集が生まれ、コラボレーションの実践活動・事例研究がなされ、実践モデルも紹介されてきている。今後、更に重要性が広く認知され、多くの研究がなされ発展していく分野である。

2)「協働」の定義・概念

藤川(2007)によればコラボレーションは、英語のcollaborationが原語であり、「現在においては、協調して働くという意味を含んだ協働もしくは、協働することが、もっとも頻繁に使われている」と述べられている。「協働」について、「広辞苑」では、「(cooperation; collaboration)協力して働くこと」と記されている。また、各論者によってコラボレーションについての論調は様々であり定義も定まっていない状況である。「協働」の定義・概念の再検討を行い表2に「協働」の定義・概念についてまとめた。

①欧米の各論者の定義・概念

欧米の論者らは具体的な行為や活動に着目し、論じている特徴がある。

吉池・栄(2009)によると、「単独では解決し得ない課題に対して、多様な人々が協力して達成を図る協働活動について、先駆的に概念整理を行ったのがGermainである」とされる。Germain(1984)のcollaborationの定義・概念においては、「一つの分野では達成できない、あるいは十分には達成できない目標」、「協力過程(a cooperative process)」が挙げられ、その後の各論者は定義・概念整理においてこれらを含めて述べている。またAbramson & Rosenthal(1995)は、「協働」を、専門職間のみで展開する援助形態と狭く捉えるのではなく、定義の中で「多様だが各自自立した行為者(組織あ

るいは個人)」という、非専門家を含めたより包括的な概念として捉えると述べている。

Hayes,R.L.(2001)は、カウンセリングにおけるコラボレーションという視点からその取り組みについて紹介している。コラボレーションの定義は、「お互いが利益を得ることを目的として、相異なる組織に属する個人が親密に交わること(p.108,1.56)」と述べ、コラボレーションの本質的要素《1.相互性(mutuality),2.目標の共有(Shared Goals),3.リソースの共有(Shared Resources),4.見通しを持つこと(Perspective Taking),5.対話の発展(Ongoing Dialogue)》やその効果についても考察している。

②亀口(2002)の定義・概念

亀口(2002)は、コラボレーションの定義について、その定義には複数の例があること、また、協調して働くという意味合いを含んだ「協働」もしくは「協働すること」が最も頻繁に使われていると述べる。亀口はさらに、その概念そのものが一般に浸透していない現状を挙げ、あえてカタカナの「コラボレーション」を用いている。

亀口はまた、コラボレーションについて、「分野を超えた対話や意見交換を意味したり、共同で計画や決定・行動・あるいは思考することを指すこともある(p.6,1.11)」とし、また、ヘイズ、高岡、ブラックマンの定義を例に挙げ、一般的には「相互性、目標の共有」、「リソースの共有」、「広い視野で考えること、対話」などといった原則があることを踏まえた上で、コラボレーションを定義している。

③渋沢(2002)の定義・概念

渋沢(2002)は、「協力」「コーディネーション」「コラボレーション」について、「協力」は、専門家、あるいは組織がそれぞれ個別の目標を達成するために他の専門家あるいは機関と共同で作業をすることを意味し、コーディネーションは、職種・組織間で情報を交換しあい、作業を計画することを示すとし、コラボレーションは、協力とコーディネーションの延長にあるものだと述べる。また、

協力とコーディネーションとは異なり、目標と業務を一緒に計画することが要求されるとする。そして、コラボレーションの要素について言及している(表2. 参照)。

④藤川(2007)の定義・概念

藤川(2007)は、コラボレーションについて「コラボレーションとは、複数の職種や立場の人間が関わる複雑な実践活動を示す概念である」と述べ、また、その概念や定義の曖昧さを指摘している。そこで、藤川は、コラボレーションがどのような協力のあり方を指し、どのような特徴を持つのかをリエゾンやリファラーといった他の概念と比較しながら、「援助活動の主体」「援助活動の内容」「援助目標と援助計画の形成の仕方」「援助活動の責任」「援助活動のリソース」の観点より、整理を行っている。そして、コラボレーションは、チームワークの一つの形であるといつて差し支えないと述べている。

⑤野坂(2008)の定義・概念

野坂(2008)は、医療・福祉・保健分野における協働に関して、「協働」といっても「ネットワーク」「チーム医療」「連携」といった様々な呼ばれ方があるとし、それぞれの若干のニュアンスの違いがあるものの、ほぼ同義語とみなしてもよいのではないかと述べている。ここでは、「連携」も「コラボレーション」も「ほぼ同義語」として考えられている。

⑥吉池・栄(2009)の定義・概念

吉池・栄(2009)は、「連携(cooperation)」と「協働(collaboration)」を階層性のある手段的概念であると考え、「連携」は協働を実現させる手段的概念と考え、『同じ目的をもつ複数の人及び機関が協力関係を構築して目的達成に取り組むこと』を「協働」と定義づけている。

⑦津川・岩満(2011)の定義・概念

津川・岩満(2011)は、精神科のチーム医療における「協働」を例に挙げ、①構成員、②協働のプロセスについて述べている。そして、チームのメンバーは、自身の専門性をもちながらも、各々の

役割を互いに理解・尊重し、共通の目標に向かって共通の言葉で情報を共有してはじめて、協働が始まると述べる。

表2. 「コラボレーション」の定義・概念

Germain (1984)	協働とは、単独の分野(あるいは個人)だけでは達成できないあるいは充分には達成できないヘルスケアに関連した特定の目標や職務を遂行するために、二つあるいはそれ以上の分野(また、場合によっては同じ分野の二人あるいはそれ以上の個人)がコミュニケーション、計画、行動を交換する協力的プロセスである。(p.199)
Andrew (1990)	専門職間連携は、異なった専門職が共通の目標を達成するために、独自の知識・技術・組織の展望・個人的態度を駆使して問題解決を行う時に起こる。(p175-176)
Abramson& Rosenthal (1995)	多様だが各自自立した行為者(組織あるいは個人)で構成されたグループが、共同主導権を持ちながら、共有された問題を解決するあるいは共通の目標を達成する流動的なプロセスである。(p.1479)
Hayes.R.L. (2001)	コラボレーションの定義は、お互いが利益を得ることを目的として、相異なる組織に属する個人が親密に交わること。 コラボレーションの基本的要素 1. 相互性 (mutuality), 2. 目標の共有 (Shared Goals), 3. リソースの共有 (Shared Resources), 4. 見通しを持つこと (Perspective Taking), 5. 対話の発展 (Ongoing Dialogue) (p.108)
亀口(2002)	所与のシステムの内外において異なる立場に立つ者同士が、共通の目標に向かって、限られた期間内にお互いの人的・物的資源を活用して、直面する問題の解決に寄与する対話と活動を展開すること。(p.7,1,21)
渋沢(2002)	コラボレーションについて、「協力」は、専門家、あるいは組織がそれぞれ個別の目標を達成するために他の専門家あるいは機関と共同で作業をすることを意味し、コーディネーションは、職種・組織間で情報を交換しあい、作業を計画することを示すとし、コラボレーションは、協力とコーディネーションの延長にあるもの。 コラボレーションの要素 1) 共通の目標の設定と同意, 2) 目標達成の責任の共有, 3) それぞれの専門知識を駆使して一緒に作業することである。(p.271,1.5)
藤川(2007)	コラボレーションとは、異なる専門分野が共通の目標の達成にむけて、対等な立場で対話しながら、責任とリソースを共有してともに活動を計画・実行し、互いにとって利益をもたらすような新たなものを生成していく協力行為であると定義することができる。(p.18, 1.22) [援助活動の主体] 援助チームのメンバー(対人援助の専門家、時に利用者自身や非専門家) [援助活動の内容] チームで利用者に対する援助の目標と計画を立て、メンバー間で相互にコンサルテーションをしながら、それぞれのメンバーが利用者に対して直接的援助を行う。

	[援助目標と援助計画の形成のしかた] チームのメンバー間で形成され、共有される。 [援助活動の責任]チームが追う。 [援助活動のリソース] チームのメンバーが持つリソースの共有。
野坂(2008)	コラボレーション(collaboration)とは、複数の主体が何らかの目標を共有し、どちらが上でも下でもない対等な関係の上で、双方がエンパワーされた状態でなされる活動を言う。(p.192,1.2)
吉池・栄 (2009)	「協働」とは、同じ目的をもつ複数の人及び機関が協力関係を構築して目的達成に取り組むこと。
津川・岩満 (2011)	多職種による協働とは、①例えば、精神科であれば、医師、看護師、作業療法士、精神保健福祉士、臨床心理士など、がん医療であれば、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、管理栄養士、臨床心理士など、多職種でチームを構成する。 ②チームとしての共通の目標に向かって、各職種がそれぞれの専門性をもって、お互いに連絡をとりながら、患者を治療、援助する。(p.763,1.5)

IV 考察

本稿では、「連携」と「協働」という言葉が用いられるようになった背景を概観し、先行研究におけるそれらの定義・概念の比較、整理をおこなってきた。「連携」と「協働」という言葉は、同じ流れから派生してきており、特に欧米では、「連携」の具体的な行為や活動へ着目しているという特徴から「cooperation=連携」ではなく「collaboration=連携」という言葉が用いられてきたと推測される。そして、日本語に翻訳される際に、論者によって訳語が異なるということから言葉の混乱が生じてきたと考えられる。

1. 「連携」と「協働」の相違と定義・概念

「連携」「協働」の定義・概念に関する先行研究において、両者の相違について考えたい。実際、「collaboration」を「連携」と訳しているものもあれば、「協働」と訳しているものもある。また、「連携」の概念には「協働」と同様であると考えられるものもいくつかみられている。従って、明らかな相違があるとは言い難い。

しかし、野中(2007)は、「チームワークをめぐる用語」として、collaboration(協働), cooperation(連携), coordination(調整), linkage(連結)とし整理

している。吉池・栄(2009)らは、「連携(cooperation)」とは、協働を実現するためのプロセスを含む手段的概念」としており、協働を実現するための一つの手段として捉えている。ここでは、「連携」は、「協働」するために、構成員が相互に「つながる」手段として考えることができるのではないだろうか。「協働」には、「つながる」だけではなく、「共通した目標・目的」「協力過程」「新たなものの生成」といった要素が挙げられ、また、「協働」する期間を限定的に提示しているものもみられる。このような点からも、「協働」の過程はより構造化されていると考えられる。また、藤川(2007)は、「協働」はチームワークの形の一つと述べており、「協働」は、「連携」よりも、各構成員のチームの一員であるという認識が高いと考えている。

そこで、各論者の「連携」の定義・概念をみていくと、「異なる専門職・機関・分野」「共通の目的・目標の達成」「連絡・調整を含む協力関係」という共通する部分が見られ、これは亀口(2002)も違う形ではあるが述べている。「連携」は、共通の目的・目標の達成に向けて支援をおこなう活動の連続体でもあるので「協働」との境界が曖昧とされていることが多い。

次に、各論者の「協働」の定義、概念をみてみると、「異なる専門職・機関・分野」「共通の目的・目標の達成」という「連携」と同じ共通項があげられる。しかし、「協働」が「連携」と異なる点は、協働が「協力過程(行為・活動)」という、協力関係を前提とした各専門職間の活動に視点があてられていることがいえ、上記で述べたように、より具体的で各構成員のチームの一員であるという認識も高いと考えられる。

これらを踏まえ「連携」と「協働」の定義・概念を筆者らがまとめ提案をしてみたい。

連携とは、「異なる専門職・機関・分野に属する二者以上の援助者(専門職や非専門的な援助者を含む)が、共通の目的・目標を達成するために、連絡・調整等を行い協力関係を通じて協働していくための手段・方法である」と定義することがで

きる。

一方、協働については、その定義にあたり、心理臨床の視点でもある“人生の専門家はクライアントである”という視点から、協働を行っていく際は、クライアント本人をまじえた協働関係ということも、今後は重要な視点になりえるのではないかと考える。これらのことから、協働とは、「異なる専門職・機関・分野に属する二者以上の援助者(専門職や非専門的な援助者を含む)や時にはクライアントをまじえ、共通の目的・目標を達成するために、連携をおこない活動を計画・実行する協力的行為である」と定義することができる。

2. 心理臨床における「連携」「協働」

心理臨床的援助において、医療・福祉・教育・産業といった様々な領域、また、臨床心理的援助の一つである臨床心理学的地域援助など、「連携」「協働」が必要であることは言うまでもない。それと同様に、いつ、どこにどうつながっていくか、協働していくかということも重要である。村瀬(2008)は、いたずらにコラボレーションを考える前に、誰のために何を目的として、いつ、どこで、どのように誰によって行われるのか、という基本事項を明確にすることが前提であると述べている。

「連携」「協働」は、それが持つ特色により多くの対人援助職にとってのテーマの一つとなっている。牧原(2002)は、「協働」について、「互いの領域から一歩出て、各々が「重ね合わせる」ところから、新しい創造物が生まれるということになる(p.317,1.8)」と述べ、多職種が相互に「重ね合わせる」ことの必要性を挙げている。今日、専門性はより深く細分化されており、それ故、専門家同士の「連携」「協働」が物理的な問題も含め難しくなっている場合もあるとえる。だからこそより意識的に「連携」「協働」を考えながら活動していく必要があると考えられる。そのような中でこそ、牧原(同上)が述べているように、「重なりあう」中で対話を重ねていくことは、お互いの専門性を知り、協働過程を作り上げていく中でも必要

なことであろう。久留(1989,2003)もまた、「臨床援助に関わる人間は、他の領域の専門性をより開かれた意味で理解する必要があるし、同様に、自己の専門性を開かれたかたちで提示し合う必要がある」と述べ、専門家を含め関わる人間が開かれた関係にない限り、自己実現的变化は困難になると、臨床援助者の開かれた人間観、治療観、専門家観の重要性について述べている。

また、連携・協働しながら立体的な援助を提供するとき、援助者とクライアントの関係性への視点も大切ではないだろうか。「連携」「協働」を行っていく際、援助者もシステムの一部であることを自覚しておく必要もある。また、論者の中には「協働」の要素に「相互性」を挙げるものもあるが、「協働」の「相互性」を考えると、援助者同士の「相互性」だけではなく、クライアントと援助者の「相互性」も含まなければならないと、筆者らは考える。その相互性やシステムの視点を持ちつつ、相互に関わっていくことにより、よりクライアントのニーズに沿った支援が提供できるのではないだろうか。

最後に、生物—心理—社会的モデルのように立体的な援助の提供が求められる中で、多職種とつながり「連携」「協働」することは、今後も様々な場面で求められると考えられる。しかし、「連携」「協働」すること自体が重要であるのではなく、クライアントがそれをどのように希望しているのか、それが、クライアントにとってどのようなかたちで有益なものであるのか、どう活かされるのかということこそが大切であり、「連携」「協働」の先にはクライアントがいることが前提であることを添えておきたい。

引用文献

- Abramson, J. & Rosenthal, B., (1995): "Interdisciplinary and Interorganizational Collaboration" In R. L. Edwards (Ed.), pp. 1479, *Encyclopedia of Social Work* (19th edition), NASW Press.
- Andrews, A., (1990): "Interdisciplinary and Interorganizational Collaboration" In L. Ginsberg et al. (Eds.) pp. 175-176, *Encyclopedia of Social Work* (18th edition), NASW Press.

- 藤川麗(2007): 臨床心理のコラボレーション 統合的サービス構成の方法. 東京大学出版会.
- Germain, C. (1984): *Social Work Practice in Health Care*. Free Press.
- 細田満和子(2009): チーム医療の歴史と概念 社会学的アプローチから見えてくるもの. 看護22(4), pp.46-55.
- 長谷川俊雄(2001): 「連携」の実際と課題—社会福祉援助方法としての「連携」の具体的指針—. 明治学院大学大学院社会福祉学25, p201-207.
- Hayes, R, L. (2001) カウンセリングにおけるコラボレーション. 東京大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要第24集, pp. 108-113.
- 久留一郎編著(1989): 臨床援助の心理学. 北大路書房, pp.3-4.
- 久留一郎(2003): 発達心理臨床学 病み, 悩み, 障害をもつ人間への臨床援助的接近. 北大路書房, pp.1-2.
- 亀口憲治(2002): 概説 コラボレーション—協働する臨床の知を求めて (コラボレーション—協働する臨床の知を求めて). 現代のエスプリ (419), 至文堂, pp.5-19.
- 久保元二(2000): 21世紀の架け橋—社会福祉の目指すもの3社会福祉援助と連携. 中央法規. Pp.108-123.
- 牧原浩(2002): 対人援助における専門職の協働, 精神療法第28巻第3号, pp.310-317.
- 松岡千代(2000): ヘルスケア領域における専門職間連携—ソーシャルワークの視点からの理論的整理—. 社会福祉学40(2), pp.17-38.
- 前田信雄(1990): 保健医療福祉の統合. 劉草書房, pp.13-29.
- 森下高治(2008): 臨床心理士の活動を考える—リエゾン(連携)の大切さ—. 帝塚山大学心のケアセンター紀要4.
- 村瀬嘉代子(2008): コラボレーションとしての心理的援助. 臨床心理学8(2), pp.179-185. 金剛出版.
- 中村誠文(2007): 教育現場における心理臨床家の役割に関する臨床心理学的研究—不登校に焦点をあてて—. 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科修士論文.
- 野中猛(1999): 精神障害リハビリテーションにおけるチームアプローチ概論. 精神障害とリハビリテーション. 3(2), pp.87-97.
- 野中猛(2007): 図解ケアチーム. 中央法規出版, pp.14-15.
- 野坂達志(2008): コラボレーションのお作法. 臨床心理学8(2), pp. 192-197. 金剛出版.
- 奥野英子(2010): 『連携』の概念と実現への条件. 療育47, p.6-10.
- Oxford University Press(2001): *Concise Oxford ENGLISH Dictionary*.
- 渋谷田鶴子(2002): 対人援助における協働: ソーシャルワークの観点から. 特集 対人援助における協働(コラボレーション). 精神療法28(3), pp.263-326.
- 下山晴彦(2001): 世界の臨床心理学の歴史と展開. 心理学 1: 臨床心理学とは何か, (下山晴彦・丹野義彦 編), 講座臨床東京大学出版会, pp.27-49.
- 高山忠雄(1993): 保健・医療・福祉の連携. 現代福祉学レキノン(京極高宣監). 雄山閣出版, pp.76-77.
- 津川律子・岩満優美(2011): 第62回 チーム医療/多職種協働/臨床心理士の役割と専門性. 臨床心理学11(5), 金剛出版.
- 山本和郎(2000): コミュニティ心理学. 氏原寛・成田善弘共編 臨床心理学③ コミュニティ心理学とコンサルテーション・

- リエゾン[地域臨床・教育・研修]. 培風館.
- 吉池毅志・栄セツコ(2009):保健医療福祉領域における「連携」の基本的概念整理—精神保健福祉実践における「連携」に着目して—. 桃山学院大学総合研究紀要第34巻第3号.
- 山中京子(2003):医療・保健・福祉領域における「連携」概念の検討と再構成. 社会問題研究53(1), pp.1-22.
- 参考文献**
- 安西信雄・清野絵(2007):包括的サービスを提供するためのさまざまなチーム—固いチームと緩いチーム—. 精神科臨床サービス 第7巻 第4号, pp.6-10.
- Caplan, G. (1964): Principles of preventive psychiatry. Basic Books, New York.
- 新福尚武監訳(1970):予防精神医学. 新曜社.
- 臺有桂(2002):他職種・他機関との協働を構築する活動の構成要素—保健婦の地区活動を通して—. 順天堂医療短期大学紀要13, pp.41-48.
- Dewar, S. (2000): Collaborating for quality: The need to strengthen accountability. Journal of Interprofessional Care, 14[1], pp.31-38.
- 田村由美訳(2001):医療の質のための協働アカウンタビリティ強化の必要性. Quality Nursing, 7(9), pp.57-64.
- 平林直次(2007):医療観察法病棟における多職種チーム医療. 精神科臨床サービス 第7巻 第4号, pp.24-31.
- 標美奈子・中村裕美子・井伊久美子編(1996):住民の主体的組織活動の展開 地域保健活動のめざすもの. 医学書院, pp.10-35.
- 金沢吉展(2002):社会活動としての臨床心理学. (下山晴彦・丹野義彦 編) 講座臨床心理学6:社会臨床心理学 東京大学出版会, pp.25-42.
- 菊池和則(1999):多職種チームの3つのモデル—チーム研究のための基本的概念整理—. 社会福祉学39(2), pp.273-290.
- 菊池和則(2004):多職種チームのコンピテンシー—インディビ

- ジュアル・コンピテンシーに関する基本的概念整理—. 社会福祉学44(3), pp.23-31.
- 京極高宣監(1993):現代福祉学レキシコ. 雄山閣出版, pp.77.
- 宮田量治(2007):精神科病院の多職種チーム—チームはどうすればうまく長期在院者の退院促進に協力できるか—. 精神科臨床サービス 第7巻 第4号, pp.45-53.
- 長竹教夫・青木恭子・簾内信行(1995):「連携」の評価方法に関する研究—ソーシャルワーク実践における地域保健福祉機関との連携を省みて—. 医療社会福祉研究3(1), pp.16-23.
- 仲村優一編(1988):社会福祉研究—ソーシャル・サポート・ネットワーク42. 鉄道弘済会.
- 仲村優一・秋山智久(2001):新セミナー介護福祉1 社会福祉論. ミネルヴァ書房, pp.150-156.
- 岡田敦(2006):精神科臨床における臨床心理士(特集 医療と臨床心理士). 臨床心理学 6(1), 金剛出版, pp.7-13.
- 斉藤敏晴(2000):精神障害者の地域ケアとケアマネジメント—連携手法としてのケア会議の重要性—. 新潟青陵女子短期大学研究報告第30号, pp.69-75.
- 洪沢田鶴子(2002):対人援助における協働—ソーシャルワークの観点から—. 精神療法28(3), pp.270-277.
- 島内節・久常節子編(1997):地域看護学講座別巻地域看護管理. 医学書院, pp.33-39.
- 上林美保子(2004):行政保健師の行う「連携」の概念に関する研究—地域看護分野と社会福祉分野の文献検討を中心に—. 岩手県立大学看護学部紀要6, pp.1-16.
- 右田紀久恵ら編(2000):社会福祉援助と連携. 中央法規出版, pp.108-123.
- 山本勝(2001):システムづくりの達人登場チャートでわかる介護保険時代における保健・医療・福祉のシステム作りと人づくり 上巻基礎編. 新企画出版社, pp.63-77.

Abstract

Review on “cooperation” and “collaboration” in the field of clinical psychology: Focusing on the differences of their definitions and concepts

Studies on “cooperation” and/or “collaboration” in the field of clinical psychology were reviewed in this article, comparing those notions in terms of definitions and concepts, referring them in the fields of medicine, mental health, welfare, and education. It was found that while some confusion in terms of definition was found between “cooperation” and “collaboration,” it was possible to suggest that “collaboration” connotes clearer recognition as a member among those who participate in a certain activity, and more focused vision on carrying it out.